

し、菩薩は六度の法門に就て折空觀を修す、如是三乘同く折空觀を修すとも諦縁度の差別を以つて三乘の不同を知るべし。

体空觀の体とは、体達亦是体悟の義なり、諸法を押へて即空と体達するが故なり、諸法を推檢するに、既に性實無く、但虚相のみ有り、故に如幻即空觀とも名く、此の觀は大乗の觀法にして、一切萬有は實の自性ある事なし、若し萬有に實の自性ありとせば因縁を藉るの必要なるべし、然るに萬有は皆因縁を藉て生ずる事を得る故に、は實の自性ある事なしと、萬有其まゝ置て當体即空なりと体達す、我が、弘治の頃大内義隆が陶全蓋に弑せられんとしたる時三尺の秋水を白眠つゝ、

討ち人も討たる人も諸共に

如露亦如電 應作如是觀

と詠じたりき、亦鏡像水月の譬を以つても知るべし、通教は大乗にして、其義深き故に三藏より勝れて、相即の旨を明す、即ち煩惱の体を押へて即空と明し、煩惱即菩提の義を談するなり、生死即涅槃の義、これに准じて知るべきなり、通人既に諸法如幻幻本と

生せず、今滅する所無しと觀す、六風依正の色、幻の如く化の如し、當体即空なりと依りて、眞理に入るなり。

御會式に就て

藤田 圓海

今を去ること、六百三十三年前即ち弘安五年十月十三日 末法救護の大導師たる我祖大聖人は、武州多摩河の邊り、池上山の霞と消へ玉ひぬ、我等このことを、追想し奉るだに涙の種ならざるはなし、宗祖大聖人常住の法身は、法界に遍滿して、感あれは則ち應じ給ふと雖も、應現の肉身即ち英爽の風姿温平々たる慈顔は、遂に拜すること能はず、嗚呼悲哉生死は世相の常規と、佛の教へ給へるに、何ぞ斯く哀歎の情禁する能はざるか、怪む勿れ！ そは唯宗祖大聖人を追慕し奉ればなり、何が故ぞ斯く追慕するかそは大聖人の御恩徳の深大なるを感謝すればなり、何が故に感謝するか、そは大聖人の教を信することの切なればなり、そは我等が復活の道、一に此教に

存するを以てなり、人の哀れはなほ心なき非情に及ぶ、況んや我等が救の主たる宗祖大聖人が滅度の日に遇ふて、誰か其悲歎を深くせざるものあらんや、宜なり、池上の山、身延の峯、此聖日渴仰の群衆雲霞の如く來集することや、御入滅の地、元より池上なるは、大聖釋尊滅度の儀相に擬し給ふと雖も

九箇年の間心安く法華經を讀誦し奉候山なれば、

墓も身延山に立させ給へ、未來際までも心は身延

山に可住候、(波木井殿御書)

どの御遺文を拜し奉れば、宗祖棲神の法嗣は、身延山なること瞭として見るべきなり、若し依正無礙の大旨よりせば、常在靈山は、總じて一切處を指すべしと雖も、立行設化の道場に約して、殊に身延を指定し、以て末法の群機を導き給ふなり、宜哉、妙判の中に

かゝる砌なれば庵の内には晝は終日に、一乗妙典の、御法を論談し、夜は竟夜、要文誦持の聲のみす、傳へ聞く釋尊の住み給ひけん鷲峰山を、我が朝此砌に移し置きぬ(身延山御書)

其上此處は人倫を離れたる山中なり、東西南北を

去て里もなし、かゝるいと心細き幽谷なれども教主釋尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相傳し日蓮が胸中に秘して隠し持てり、かゝる不思議なる法華經の行者の住處なれば争か靈山淨土に劣るべき法妙なるが故に人貴し人貴きが故に所尊しと申すは是也(南條兵衛七郎殿御返事)

此の如く、聖文昭々たるのみならず、碎身の舍利長く當山の鎮となり、純信登詣の者をして、益々歸依渴仰の念を生せしめ給ふ、此を以て宗祖が色心の全体は、永く斯の山に在住して、本化の風光を發揮し來りて、眞の靈山事の寂光の道場は、他に求むべからざることゝなれり、故に一度此淨境に詣づる者は忽ち無始の罪障を消滅し、三道即三徳と轉じて、成佛の妙果を得んこと疑ひなし

彼の月氏の靈鷲山、本朝此身延の嶺也、參詣遙に中絶せり急々に可シ令來臨-是にて待入候べし

(南條兵衛七郎殿御返事)

日蓮が弟子檀那等は此山を本として參るべし、此即ち靈山の契也(波木井殿御書)

此の如く無限の力を附與せられたる靈嶽なれば、渴

仰の涙を注ぎ、歸依の心を傾くるもの多し、然るに吾人曾て宗祖大聖入滅の道場たる池上山の會式を拜す、萬山人を以て埋め、四隣の喧騒沸くが如く、變調の題目は、諸種の鳴物に和して、殆ど法滅の兆かと疑はしむ、嗚呼此の靈境、徒らに都人士が狂戯の蹂躪せらるゝに至ては、血涙千行腸を寸斷するの概ありき、身延は然らず、彼我霄壤の差あり、風土人情の然らしむるとは言へ、又靈山の靈山たる特徴といふべし、噫御會式を以て俗徒の御祭騒ぎとのみ心得なば、そは宗祖を耻しむるのみならず、永く阿鼻の苦患となるべきなり、

かゝる日蓮を用ひぬるとも、あしくうやまはゞ國亡ぶべし(種々御振舞抄)

信心弱くば、いかに日蓮が弟子檀那なりと名乗らせ給ふそもよも御用ひは候はじ(波木井殿御書)

聖誠深く肝に銘せざるべけんや、溯て臨滅度時の斷琴に聞かずや、

汝等大勇の信地に住して、疑を容れずんば、本地の妙境一時に成就せん、是を速身成佛といふ、若し信心淺薄にして我に違せば即身無間、玉の盤を

走るが如く雨の地に墮るが如し其時我を恨むべからず、諸子深く念持して忘れざれよ(薩挿傳抄錄)

餘韻今尚は我等が耳朶に響くが如し、嗚呼信哉、此信ありて始めて日蓮が弟子檀那等との御呼聲に應じ奉るを得べきなり、我等宿福薄くして生を澆季に稟け、年々此の聖日に臨んで慈慕の情に堪へず、轉た悲痛を重ねるのみ、されど、幸に不惜身命の信念あれば、そこに聖鑑し給ふべし、この遺訓昭々たる上は、吾々門下たるもの、宜しく其教訓を顧りみ、心に刻み、身に躰して、以て大佛事に貢献すべきのみ大佛事とは何ぞや、應身の宗祖は即ち法身の宗祖たることを信解し、而して法身の宗祖を拜し奉るは、即ち直に溫容慈顔に接し奉ることを疑はず、而して此會式は、靈山虚空會にして、自身來詣して、此靈境にあるは又此れ虚空會上の人にして、上求下化の大法を圖り金口より聽受し奉ることなるを忘るべからず、斯の如くにして初めて御會式と稱するを得べく、久遠本成の靈山と稱することを得べく、我等は斯の信念に住して、始め非滅現滅の會式を修行し奉る資格あるべきなり。